

明水加
卷 506
卷 17

貉睡堂橘仲字成負編著
梅庵山崎叔長保春較訂

倭字古今通例全書

武江書肆息障軒藏版



倭字古今通例全書序

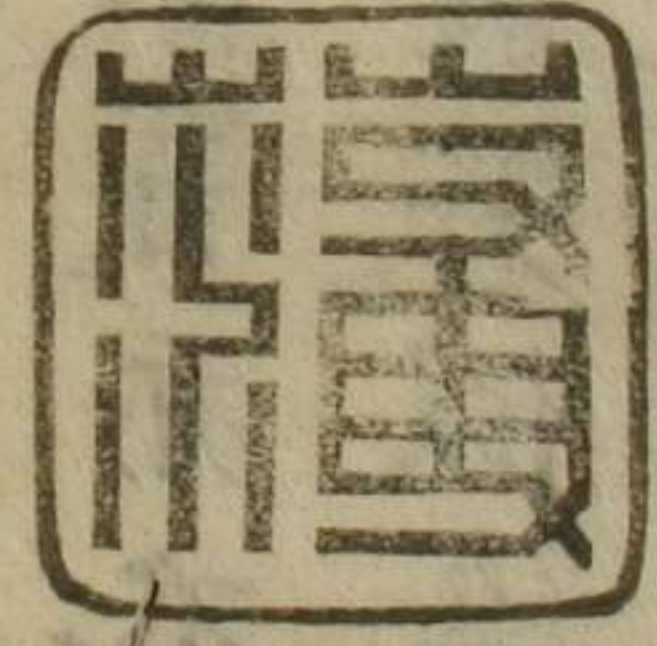
有_レ土_レ此_ニ有_レ人_レ有_レ人_レ此_ニ有_レ文_レ天粟晝零市妖
夜哭何國夫不然中華之字法六八代降
而變然音韻訓詁不甚齟齬天竺之悉曇
體製聲音有_ニ三_一密_レ之定式而東漸惟尚矣
離合微誤則翻譯殊塗
本朝最初徐市未_レ齋墳典前不可_レ無_ニ文字_一
惜哉不聞其說蓋移_ニ便簡_一而失_ニ其本原_一乎

今之國字謂之假名片假名者省楷書平假名者畧艸字其省畧體制之祖人未知爲誰吉備公喚起阿之一聲而大衍五十韻響空海師發端以之一音而四十七律足徵吉備公者不能知五音直拗無空海師則不能傳字法大成其法者藤時雨亭是也藤氏歿而知者鮮矣夫假名者雖人用之多不能知其方法也其實彷彿似

中華天然之字法不通韻書而達其意者未之有也縱通韻書亦不知訓母讀子之轉化則其道難矣若假名少差則事理乖戾疑惑起假名法重哉古代之歌書或紀傳等假名未定猶詩三百平側位次無定格也故不敢泥古書之假名第所可取者取之也家兄成員向編假名字例憂有所其未盡而亦復撫古今之正例而成新編

一部八冊名以倭字古今通例全書觀者
就此書獲假名文字之例法者未必無小
補云

元祿九丙子春三月甲申奇山薄保春序



假名文字の書の家これ選
みしはきしうあつさのをも
巻の初これたきしうあつさ
假名字例は巻をまの簡便
了れしらせ法の要をいれむらひ

やうやうな加倍して集めて八冊と
 ありぬまこい類を拾い演乃まゆ
 抄敷けくまこく五枚車存くま
 棟ひろき亮三つくまこく平し唯此八卷
 まつものく存する成きしねのあまれ
 ばくまをて大くまこくけしんら
 らじの名つよまて倭字古今通例と
 以校書、つ楓葉塵埃ちをまへ
 しをうひてまへはまへひてまへ
 らじの巻の字例校書すつまへ
 まらむけの文字も地をくまへ
 する所はくまへもゆりぬら此書八
 巻の中もまへひてまへらの葉まを
 まへぬれわくまへ人もまへを
 らし其惡やをいあしまへは鳥乃わひ
 かくゆおわくまへこれ一のまへま



開	ワ	ラ	ヤ	ミ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
開	ウイ ワヤ	ルリ ワヤ	ユ井 ワヤ	ムミ ワヤ	フヒ ワヤ	ヌニ ワヤ	ツチ ワヤ	スシ ワヤ	クキ ワヤ	ウイ ワヤ
合	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
開	ウイ ウユ	ルリ ウユ	ユ井 ウユ	ムミ ウユ	フヒ ウユ	ヌニ ウユ	ツチ ウユ	スシ ウユ	クキ ウユ	ウイ ウユ
開	エ	シ	エ	メ	ヘ	子	テ	セ	ケ	エ
開	ウイ ウエ	ルリ ウエ	ユ井 ウエ	ムミ ウエ	フヒ ウエ	ヌニ ウエ	ツチ ウエ	スシ ウエ	クキ ウエ	ウイ ウエ
開	オ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	ヲ
	ウイ ウオ	ルリ ウオ	ユ井 ウオ	ムミ ウオ	フヒ ウオ	ヌニ ウオ	ツチ ウオ	スシ ウオ	クキ ウオ	ウイ ウオ

子舌半濁
 重音
 軽音
 舌頭重
 舌上輕
 半齒半舌
 喉音雙飛
 アワマ獨立

○五音五位

唐漢吳五音相通
假名直拘共通用

假名凡例

初五相通 二四相通 二五相通 三五相通

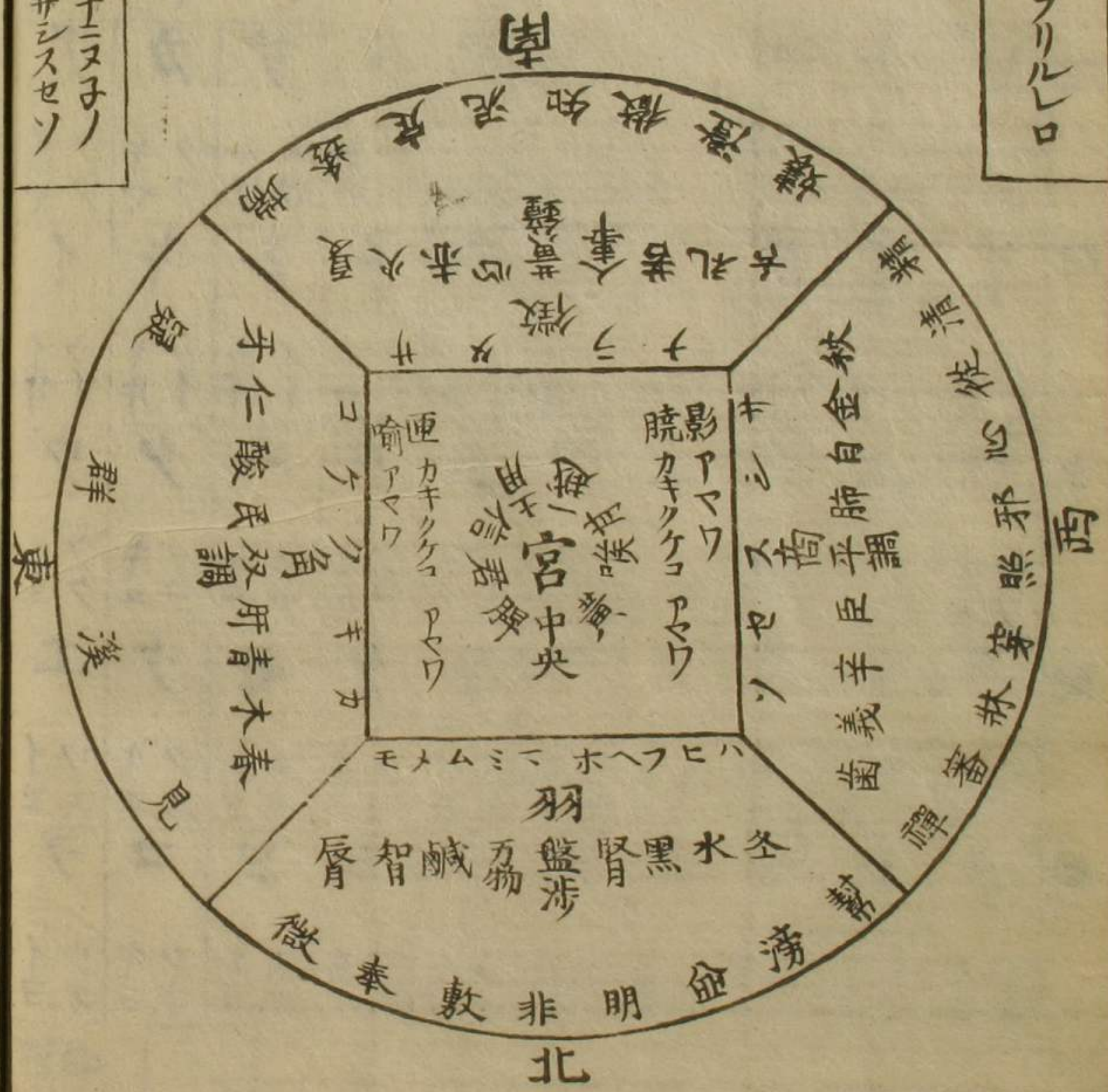
直音
ウ横ニ引ハ合ナリ
拘音在左右
左ハ開
右ハ合

さりかむ ころて きたる 人の人の 蜺 守ふ
 志ころむ して 割 割 氏 のむら 先
 元禄八子の秋も 七月七日橋の成 災
 兼河江府れ ころり けいさめ

羊
來
リ
ル
レ
ロ

七音總括畧圖

半
日
十三
子
ノ
齒
サ
シ
ス
セ
ソ



○空海師無同字長歌

父字母字及平上去入
大小長短ノ傳アリ

いろはにほへとちりぬるを
 わかよたれづつね奈らむ
 うねのれくやまげふこいへ
 あさきゆめみし忘れしむせす

○諸祕釋以呂波本字

色ハ旬ハト散スルヲ

吾世誰ソ常ナラン

有為ノ奥山今ッ超テ 浅キ夢ミシ 不醉モマ

韻書ニ字母三十六アリ假名使ニ亦母字アリ摠メ和ヨミニ訓母アリ彼是秘傳ニナシ来ル故今私ヲ以アラハシカタシ

○端い

智の字此下にもあるは皆い之齊灰代青未之又訓の時下のみ用事もむを經こい
難たい灰こい。又中に用事もむを小ちいこい。逸何のまふこ。又訓の時ひびきこり
もいなり譬言美らけい樂たれい悲かあーい喜うれいホこ。又書かいら
啼をいて旅をいて此類きく再ぬこ委口傳ニ

○中お

おの字訓此字共々用事多し一譬ハ杭くの靈なるお非くれをおおこ。又
し急にぬる時たこおこいをくぬるり傳ふ。又訓の内よわを書事一字
傳ふまれば万字明之然此訓母よりて替りもむこ口傳ニ

○奥い

是とイと後事訓の下にさあつたかこひこいさ海さハすくか一譬
葵わあひ營うごひと或あつひハけ類一方ニ云はれりみ音れ内多ハヒフ
るま。或ハ侍さあつひ。相あひあ。云ひひ。或ハ云ひいん。相
あひあん。あこ。又ひヲミト後事苦々うい哀多ういハ書れり
他ハ用事の義あり口傳ニ

○端へ

是とエト後事訓の字此る又トニ書時用之譬ハ歸かろ古いあく前
才ハ鼎かろ。如は此類一方ニ云はれり他のうひあ。み音の内多ハフニ
愁うれい。給たあへ。等こ。又ゆにかうふるも調そくの。是ハ書れり
そん。備そん。替か。是ハ書れり何も口傳ニ

○中い

訓の時ゆニさふハ皆え之圃きこえ。絶くえ。寒さこえ。是
たゆえ。は類唯者にて相さるる。又杖は之角ふえ机はくえ等

はも用之但口傳る。又わの字にわらうと喉音にまうせつよ用ひある位で
はまの四首字にわあをせける他のも亦あり

○奥忍

訓の時しう字小用事多し下に書ハ未も忍聲了忍ホ之忍之此是
別傳史の上詳之又忍をくぬるにあしひあり

○増ほ

是うをと讀事訓の中下ニ書時之譬ハ勢いきりひ比こりひ垣生カキ
ハあ之。又忍にんひり字ハ訓の時皆ほ之庵いかり岩いと不那こりり
類ク不遠志不ひ類之然に難ろと又遠之依しと書時ハ之是ホハ訓
母による何も口傳あり

○中を

てにこれをも傳之直字を〜婢たやう箱緒こころと魚うとけ類
あつと他準る

○奥た

是ハ讀事下ニ下ニ書事あり但一字はく二字はあつ時ハ書りりも
又書續る時中此をヲ用傳例あり譬ハらとあひ或ハあととと或ハ
あをくともあこれヲとぬるに傳あり中ても亦然と

○わの字

訓の時ト又書りり〜但ニ掃のみと此やまニ掃組とつとびるどハ各
別之。又訓の字ニも一字はく二字は訓にきこゆ時ハヲ用譬ハ諺
ことごと業あつとあつとけ類之。又聲の字ニ官くもん郭くく〜
光くつう回くとい過くワ活くもら等ハ皆わととト書ハ非之殆口傳ニ

○はの字

是ハ中トトトニ書時ト讀譬ハ庭にハ川かて祝いとひ偽いつら
思わも〜あつとつら〜あつと他ハ推てあつ〜ワハの是別あひ

○うれ字

聲ニハハあつと東冬江等之他準る。又讀にも用りあつとたるふは
あつと弱ワく細ワく辛ワく懐ワくは類掬音ニ過トて一あり
又ハ通ふる冠あつと考む〜香あつと〜は類之。入聲ハトトハあつと

此類ナリ

○為持

モタセトハ譬ハ柱ガウ琴ト云字ヲ持セテこぢりト訓ニ或ハ閑^{サビシ}翁ト云
字ヲ持セテ木きをさびト訓ス此類多シ

○變通

一ハ通スル字アリテ又其ヨリ通シ云譬ハ子字ニ比トハ唇音ニメ
通シメトハ拘音ニメ通之他ノカナニモ此キニアリ

凡例終

一凡文字ハ伏羲氏一陽一陰の畫と起して奇偶此象をなりしゆふこれ文字
の大祖なり八卦^ハの畫^ヲをこころと六十四卦成後^ニ黃帝乃時^ニ義韻^ト也
いふ人多れ是^レと見^テ文字を仍^ル是と古文といふ周室王の時史籀^ト
云^ハの古文を變^シて大篆乃書と云^ハ秦の始皇^トとき^ニ李斯小篆と
云^ハり同時程籀^ノ書を^ハり^テ筆畫省畧^シて^ハと^ク徒隸^ノと^ハり
こ^レに^ハ名^ヲも^ト今^ノの^ハ字^ハ是^レより^ハ出^ル漢^ノの^代り^ニ動^リて^ハ草書^トて^ハ草聖
の名^{アリ}晋^ノ王羲之^ノ草^乃書^極と^定り^テ書^ハら^レて^ハ似^タる^字が^ハづ^レ此^ハら^リ
あ^ハら^レど^ハと^ハら^レる^ハも^ハ天竺^ノあ^ハら^レる^ハ梵^ノ天王^ノ澤^テ悉曇^ノを^ハり^テ曰^ハ十七
言^とも^テ物^ヲも^テ合^成し^テこ^トに^志す^ハび^テ轉^用す^レ此^ハゆ^ヘく^ハ梵^ノ字^也云
悉曇^云こ^ノに^ハ成^就と^隴と^梵字^によ^リて^ハ切^切の^事を^究究^スる^の義^ナり^自か
ち^も世^古ハ^ハ文字^{あり}て^ハ事^となる^はめ^いり^乃ち^ハ唐^土此^ハ文字^をか^り
こ^ハら^レる^ハ省^畧して^ハ文字^のそ^と不用^すの^ハ多^クなり^ます^と用^ハれ^る是^を
假^名字^と云^ハ弘^法大師^をに^あら^はれ^る字^曰十七^字を^あら^はめ^同字^ハの^中に^ハ
と^ハら^レる^ハ之^字と^{なり}て^ハいろ^はら^へ云^ハ減^り仮^名と^つふ^の法^乃代^不易
乃^定例^{なり}と^{なり}一^其心^ハ行^を常^の四^句此^ハ偈^をう^けり^韻字^ハこ^がる^く

て一丁の七字をけりて日向偈此心と修しゆるもの、現世罪障あくて死
と南來あにうごうひりらんやのこすり妙作よのほはれよく及なりあ
らば其るうまごふ人目域乃彌首んもはものびるるや

一行阿の仮名文字遣と云書りつとて其序より云来抄中約言 定家卿 家集拾遺

愚草此傳書と祖父阿の目 干時大炊卿 親行又祖中されけり時親行中て云

をればえゑいぬひの文字此声趣ひける誤あるたうて其字の凡べきがて

きりゆゑく然る間此字をりて後字のこゑり定とるなきより黄つよ中

にこれもあつ目来より思ひよりしりなることば主變つたぬのふ書か志

可進中わのされけり大抵せばほをこゑり中亦悉其理おつりて列

合点され早然去文字を定之奉親行の抄か是世筋也加之行阿思案を

は又權者乃製作として云名此抄系の字といろはり縮みりて文字此数れを

くる記よいぬひをね母い多く同様のあつてありぬ各別此要用につふなき

謂とぬる先達の類書備されたゆりどもちるも是非此迷ひをりうんだら

ふ遊く考る此みりもあつば更こ又はわはむうふの字あをあつり

く志れりり人早其れはほをよすれわははかふむらう同どきた

よりて是あを書りて故くとぬ抄而の例ありといふも是にて准拠もく

きり仍子孫亦此勅勅を守りて可保秘は序よりよるに行阿の親行の抄を

又くせりりとも其抄せりやうに但行阿此抄の中に皆のそくををし

其流親り此抄をにらつてれり親行もを俗の仮名はまうやうとせけは行

阿もいすご不熟事れ混れ紙繆とくうらうら畢竟かたは此は付昔い

す不定日本紀よりて二代実録まで此國史万葉集新撰万葉古語拾遺舊

事記古事記延喜式和名抄古今和名集其外家々の集れりかよとてま

る人又をたえを未乱てあり今わやうの書を仮名を他抄とてかかてり

ども其中より用ふりらるとかたきとれと取り取らるるものたうらるや右此書

と他抄とせしむる時ハ仮名を此ははるきやいやうにわいてしるる

る一假名の法ハ平上舌入の四声はまうらいててこゑゆりぬ中國あてハ経傳皆

韻にりて況約神珠唐元和の陽甯公南陽新處忠等四聲字法とるると

経傳の叶類といふも今此法則とまうらきとのりりるんぞ舊記よりま

すんや只理此正道よりまうらいて可也をまうらるを此書あすこ出たり或

雜傳し或古書と他抄よりて愚昧のたうらかりまうらるをり徴とする

小これとちりあらわ一向くをさ不知ゆるるや、仮名此ゆるんをほまびくう
せば古今此是非得失たあらうをさんるるがごとくあらん

一言語ハ水土風氣によりて書ハ中国とるびる廣きぐあふ一域の内は方此譯
と置事礼記亦凡由況天竺日なち方らるるふなごらうを後不意本朝ハ
キマニシマンズツユツミクルクノ聲此類不用ゆるとのけく文字にうらごど
ラリルシロのみ字此訓をう但うの字ハ増此一字あり是とて増の字しツの
聲とらうツと轉じらうツとラチと化一あうそらると又此字ハかを三字よかき
訓ハうみ六字うかぎ此二字二字の訓と一字乃至ははらよむはらと名あ
の事一字此訓と二字三字と一字此うらうはらよむとよみあも一字端的二字
下畧三字中畧四字上下畧とハ大く此形や一字此訓と畧し又ハ二字三字此
訓と二字のうらうはらよむとそも不畧一とてすく用るも訓母訓子訓孫
ありよくあらい執るる

け書はぐるあきはももまひのみるこ
はちこのあはれいよまのゆるき假名つも
のまのことなし一そああわうさうかあ
るに成いらはまに志らひ類門とてそ
らむあいらうららむびらあうこのあ
まはていなるまきい事物れ多端むらひ
けくせたいらまあらんやた、大既と
ある一字此例とあはれのとあり

部類

第一乾坤

天象 地形 家屋 名所

第二氣形

鬼神 人倫 支脉 獸鳥 魚 蟲

第三生植

木 草 果 菌

第四服器

衣類 食物 藥品 用具

第五雜事

言語 祭事 官位 氏姓

倭字古今通例全書卷一

自以至波



吉備公偏假名之字母伊也空海師以呂波首字以也 以變以變いと又伊變伊

乾坤 いぬお

乾

乾是陰陽五行、總司万物本也故周易以乾開卷ノ初トス且イヌ井ト云ニ陰陽開闢ノヒキ有エテ以テ書ノ初トス

いづよひのつき

徘徊月

月ノサシ出テ立ノホリヤラ又躰ヲ云源氏物語ニ月トイざよふをどト有又一一雲万葉ニいさよふやはいもはるわん又一一浪新古今集ニあろ本にいさよふをみれをとあけく

いづよひのつき 不知歷月

又不知夜月トモ又十六夜月トモ

いづよ

遊絲

上字聲イウ一一八陽烟ノ俗ニ系遊ト書ハ詔之。遊絲續乱碧羅天ト一リ古歌ニあつるまきうたろそいといふ又野馬ト云乱絲野馬草深春萱空相白

いづら

雷

作雷同一ハ陰陽薄動ナリ

性理大全天度説之處曰、陰陽相擊也。朱子曰、如今之爆杖、蓋鬱積之極而迸散也。薛文清讀書録曰、余在沅辰、令一小童燒栗、忽慙破聲爆、可畏、蓋熱氣在內、不得出、故奮烈、而有聲、先儒論一霆之理、蓋如此。

いぬひがり

牽牛

倭名類聚曰、陽星也。陰星、たみづめ織女。

いせえ

曲江

入江

いんや

窟

又窩

いんや

巖

岩、富共、同字、附いんや、多岩、俗倭名類聚、見タリ、又いんや、磐源、頌云、磐石、大石、九千人、シテ引シ、千ヒキノ石ト云。

いり

石

異名、雲根、又地骨ト云。

いごがん

石近

又万世、本岩戸、相常ノ岩。

いざらぬ

小井

日本紀ニアリ、少水ヲ云、又潦水、ヒカケリ、源氏松風ニハ、いざらぬトアリ。

いたねほ

板井清水

上字作版、同、但非名所、板ニテ回シ、圍タル井、石ヲ以テ圍タルヲ石井、清水ト云、神樂取物ノ歌、いづれ板井の、いづれ里ノ水ト云。

いへ

いへ

家

古書多ハ、いへトアリ、非、但口傳。

いんや

いんや

庵

古作菴、隋唐以來作庵。

いんや

礎

頌倭名、柱礎、二字、俗石居。

いんや

郁芳門

上字声、イッ大内。

十二門ノ其一

いんや

齋院

賀茂齋王、居、簡内親。

王、未嫁者、ト定之、若無、内親王、簡諸王、女、ト定之、云々、嵯峨、天皇ヨリ、始リ、是モ、後鳥羽院ノ時、断絶スト云々、イツキノミマ、綺宮トモ書。

いんや

今案ニカ

瑞籬

此二字、タカキ氏、又ミヅガキ氏、訓、又アケノタカキ、明玉、播、又井ガキ氏、文字、井垣、皆神前、アリ、口傳、又中、出。

づものた

出雲國

素戔嗚尊於此國鯨川上拔十握劍斬八岐大蛇至尾劍刃少缺故割衣其尾視之中有一劍初

劍上常有雲氣

故曰一

いんじくに

石見國

此國有高角山

有岩崎山有岩奈仁山皆嶮石國之故曰一自海見石山之義

いづこのくに

和泉國

類聚國史曰元正天皇天武二年四月割河内國大鳥日根和泉三郡始置和泉監

いとれ

魚沼

或作治越後郡名

いぬ

飯石

出雲郡名

いふすき

揖宿

薩廣郡名

いさろ

岩代

紀伊名所同國藤代

近名所方角

いんたわん

岩國山

周防名所附

いんれー余

一池一野皆一所

いんくー橋

同國名所トモ云久米

いんげー陰

山城名所

いんせ

伊波世

新拾遺家持いんせあり花のき約きてトヨミタル越中ノ名所又續後拾かまひれいんせの杜れそトヨミシハ

雲柳大和ノヨシ又舟とひるをこれる小敷をけてトヨミシハ能登ノ名所ナリ文字磐瀬大和モ文字同以上ニテ所

いんろ

石藏

山城名所南禪寺上白川ノ東ノ凡京東西南北ニ四个所有之但南大和ノ名所也

いんいのとら

入目岳

筑前名所

いたが

磐田川

紀伊名所

いんほ

揖保

播磨郡名附いんほあり漢新續古大和志云休き

いんせき

石清水

山城國男山ノ中ノ文字妙美井氏但妙美井日本紀ニミツト訓又同訓ニ岩清水ハ近江名所在相坂関ニ

関清水トモ云

いんあひ

一口

山城在名世所謂淀一是ナリ

いほのぬま

伊香保沼

上野国名所神名帳ニ一乎、神ノ社トアリ同所ニ
ヌバカリ山ト云アリ文字沼計似富志故ヅマケニ

いびり海

祝島

作嶋作寫共俗玉篇ニ
作島国防名所

いそて

磐手

五个所續千ニかくとたふいとて此森のトヨメル、撰津ニ
新古ニいそて悪ハエウモルトヨメル、陸奥ノ新勅ニ
いそての里北山吹トヨメル紀伊ノいそて乃杜同所又俊頼家集ニ
をりてやいとてありハトヨメルハ伊勢ノ文字岩出又續古ニいそての
ハソクモクノトヨメル、

出羽ノ文字磐程ノ

いそやま

窟山

備中
名所

いそぬ

稻井

備中名所金葉ニ苗代乃
也いそ井ハ海ノセウケ

いそがん

泉川

日本紀ニ輪韓川ニカケリ今ノ木津川ノ一又イドニ
川トモ古事アリ略之山城国相衆郡柞ノ杜ノ下ノ

いざれうこ

伊豆海

即一ノ国ノ名所附いづのねやま一御山
續後撰ニいざれい川乃木山此むつき

いぬひれを

犬飼御湯

信濃名所拾遺物名ニ名此みりこひのわら
ちちていぬひれとありハすりりてけり

いさやま

磐城山

駿河名所新千ニいさきの山此まつくをれらん附い
きと海岩末島伊与国名所又磐城出羽郡名

いほさき

廬崎

二个所續後撰ニいほさき此いほさきの後乃うつせ見トヨミ
ニ駿河国廬原郡ノ新勅ニうつち山タてけいハいほさ
きのトヨミニ下總ノ附いほさき一原廬崎ト一所
新後撰ニ為氏信尺ノおむくこれハいほさきの

氣形

いほさき

磐余彦

第一代神武天皇、諱ノ尊不合尊、四子母曰玉依姫ト
海童ノ小女也、壽一百二十七歳ト云

いひれ

齋神

天神中出雲
国造一ノ

附いひれし一主

下總攝取神
經津主是之

いほら

磐筒男

根列衣
神ノ鬼

いほらみ

魑魅

又コガト訓ス
今云天狗ノ類

又同訓守宅
神ノ三字アリ

いごうじ

主人女
家童子氏
指妻女云

毛詩及
伊物ニ

いごいご

再從父兄弟
附いご
從父兄弟

ノ四字但從父兄從父弟
トナリ俗兄弟字共カク悲

いごうご

妹
いもト訓スル時
妻女ノ一ニ用

いごうびと

勳功人

又婦功氏書但是ハ女ノ織縫ワザラエ又忠字ヲいごと
ト訓ス又勳字斗モ書經古語拾遺ニハ忠誠トカケリ

世俗ニ手柄ト
云是也

いろえ
いろト云

兄
附いろト弟皆日本
紀ノ訓ノ十幹ノ工

ト云モイロイロトノ略ナリ譬ハ
甲ハ木ノ兄乙ハ木ノ弟ト他准之

いせねのあま

古書いせね

伊勢男海人

後撰ニ於麻山いせねのり月此孫衣。本朝式ニ伊勢
国、潛カキヤトアリ凡アノ字盛夫又海士皆未詳書

物ニハ漁父氏海人トアリ
順倭ニ白水郎ノ三字

いとれめ
いハレ

朮目
上字作朮同順
倭注曰手足ノ

邊ニ忽生ス如豆鹿
強於肉中

いへんや

班鳩
順倭ニ
又鳩氏

いせねのり

稻負鳥

古今集三鳥其ニ古書いせねのりト云今ニ忠
峯山田のり秋のかりいせねをく家ハいせねト云

用ニけ利家隆林の田
此稻のりト云るこれ

いご

鰯
附いごト鰯魚
順倭及多識ニモ

いせくづ

鱗
うろくづ
トモ

いとれこ

鰯
魚子ノ附いせれ
トモ

いせ

魚

伊勢物語ニ云水の上にあそびけいせをくハ又魚字ヲ
旧事紀及東鑑ニモ云ト訓スニナ板ト云モ此義ナルベシ

いせり

蟪蛄
或ハ作蟪蛄一名
石蟪又ト云

生植
いせり

银杏

山谷方白ニモアリ字彙作榧異名
鴨脚ト云キレキマウハ拘音ニテ訓ニ通ス

いんげんじ

羊躑躅

一云モクツ、ジ順倭アリ古今ニ
思ひおぼとぎ、此山のいんげん

いちぬのみ

櫟木

須俵ニイ千井ノ子ト有註曰相祓
大ニ於椎子者トアリ木モ亦ニ井ニタリ

いちぢく

無花果實

本艸ニ見タリ
異名六天仙果

いちねんそう

一捻紅

牡丹ノイ
俗ハツカ草

いんごけ

卷柏

順倭ニ

いぬらぎ

稻刈入

シホハ訓ニアラズ声ノ変
シホシフ五音相通ナリ

いもト

敢

イモガ
トモ

いぬえび

蓼藺

一名葡萄
俗ニ云エビ

いはぢけ

石耳

一名灵芝
本艸ニ

いんげん

商陸

俗ニ云マ
コハウ

服器

いぬ

古書ニいぬ不用

飯

作飯俗同訓ニ食字俱おそのトモ
シトモ訓ス附いぬ人饑

いんごけ

忌火飯

紫詠ノ
時用

いとすぢ

綫

作線同
系筋

いんごけ

緞帶

妊婦ノ腹帶
ヤ源氏ニ

いんごけ

衣裳

日本紀ニミケ
シト訓ス又

君ウケしとたて
ゆつりたれ伊物

いろ

喪衣

喪ノ時
著用

いんごけ

五緒

車ニアリ常ニ御所車ト書ハ非
五緒車ノ車ノ五緒ノ一徒然草ニモ

いえぐまら

癒藥

同 瘡

いげふ

犠牲

ノ一ハ牛羊
豚ノ三牲ノ

いんごけ

石帯

東帯ノ時用裝腰帶ト云金ニテモ銀ニテモ飾
又玉ニテモ石ニテモ飾之東帯花目ニ見タリ

類ニ但延喜式ニ云釋奠ノ三牲ハ大鹿小鹿豕ヲ用
又五牲ハ麋鹿麋若狼兔是也

いへづと

家裏土産

畧ノ家土産ト斗モ書方葉ハ裏字ヲ氏ト訓ス
素性カ亨てこと成りて家とん人又伊物都此
はとんいさやいとあしと又後捕ノ奇ニ族氏とん
りてくるかれいのトヨメリ附くさぶと草葺

いぬが

撥

字彙訓玉篇出但作撥此伊物ヲリ抄柄字ヲヨメリ
又飯匙田俗ニ杓子ト云古書いひがトモ不用之

いひねがみ

齋鏡

三種神器其一ハ咫鏡也云
又内侍所申ス又寶鏡ニ字

いげぢのたけ

沃懸地太刀

大理用之薛繪太刀巡力黒漆ノ太刀ハ六位用之有毛
抜形ノ太刀装束紫革アリ又藍革アリト東帯色自

いちえふれあひ

一葉舟

百記桂ノ記曰俠客ハ條ノ爲馬
仙人ハ葉作舟又一葉舟也云

いづき

罇

罇ノ
一ツ云

いかり

衣桁

訓コロモカケ
又ミソカケ

雜事

いかり

往古

作往俗忠經ハ越往ニ字ヲヨメリ日本紀ハ太古ニ字附
いりハれび古昔小町さいりハのびり此のさいりハ
かれハ神ノ爲
けりまけり

いさあひ

晚鐘

入相ノ
鐘声ノ

いさごおげり

一切衆生

鳥家卿自筆ノ古今集序ニ下ハ中カヲ被用又此四字
ヲ云々ト訓新古ハたはたあつたはたト云々
齊居モ同訓之長明カ歌ニうちや及びいつきの
ハの年ぬりて附いもぬれハ齋月場

いもね

今案ニのもの傳ニ

いもほり

ねもどうに

齊

又モノ井ニ此
訓忌居ルト云マ

いさあひ

嚴

シラハ表之他准之
うらハハ美モ同訓

いせり

偽

又詐又兩舌田俗ニ
ウツト云諷詐ノ

いさあひ

寵愛

作愛
俗

いさごも

雖

声スイ又虫ノ名字
書注曰似守宮

いさあひ

去來

又誘我ノニ字
平家物語ニ

いさご

最愛

最惜
トモ

いさあひ

辭

イナミト云いさあひ
ト書誤ノ口傳ニ

いきやひ

勢 作勢俗作勢非日本紀ニ徳字
千字文ニ威ノ字ヲ訓ス

いへえん

悱 字彙曰悱々欲言而未_レ能_レ之貌伊物ニハ_レえんといひハ_レ孫_ニト
アリ六帖ニ_レてハ_レへ_レく_レあ_レき_レ能_レ作_レ此_レ形_も也_は治_らふ_レ人_もも_レリ

いとひ

祝 又コトフキト訓ス神ニ八宗_ノ字_ノ日本紀ニ祭_ノ字_ヲ訓ス
女姓ハ_レ井_トカ_リ岩_井ノ水_ニトリ又位_ノ辨_ノ言_ヲ忌_トス

いんや

况 不及_レ言_ノ意_ト
闘論 作闘俗
又一_ノ諱

いんや

云 謂曰言皆同訓又是_レう_テト云_レ或_ハか_レに_レあ_レて_ハ笠_縫云_レ或_ハ
ゆ_えて_ハあ_レの_ハ黄_云物_等に_レ附_いひ_をト_ノ殺_源氏_又い_ひち_らふ_ノ爭

いふ

嘶 又い_ひめ_くトモ
馬_ノ一_ニ云
いふ_な〜_〜
言説

いゆる

所謂 下字_ハハ_レト_訓ス又い_ひち_らふ_トだ
謂_不知_源氏_等ニ

いろふ

綺 彩色_ヲモ云_又
今般時 人_ノ臨_終ヲ
サ_又附_いま

いふ

厭 俊成_うき_せと_ハ我
いな_〜〜_〜
憤 又愠_いき_ず〜_〜トモ
源氏_玉〜_〜いき

いほやう

今様 風俗_ノ謡_物ト_ハハ_師連
ハ_島ガ_謡ニ_始ル_ヨシ_{太子}傳_ニ

いさふ

訶 又叱_入リ_シカ_ル
誘引 唱_行ニ_又引
卒_正又_さ出

いらど

五十歳 下略_メ五十_トシ_モ土_佐目_記ニ_あ〜_〜ト_{アリ}
蘇_奈秋_をを_る〜_〜月_と詠_る身_とあ_れ〜_〜ト_{アリ}
一_ノ國_とか_に歌

いとが

閑 又忙
又怠
いのち_ぎ〜_〜
殞命

いづ

何 い_はれ_ト五_音通_ス伊_物ニ_れあ_の〜_〜ト_{アリ}
附_ろ〜_〜國_い〜_〜一_ノ處_い〜_〜一_ノ地_い〜_〜一_ノ方

いたづま

煩惱

作惱俗又勞ワづヒト訓スル直拘ニテ
通ス秋ニ多にワづまのワづま云々

いほり

禁忌

附イマヒゴト
忌事又一言

いほんぞ

胡

又奚又奈又焉
又安又惡

いねり

犬追物

神功皇后三韓ヲ隨ヘ玉フ時新羅国王者日本之犬也
ト書セ玉フ由來ニテ近衛院ノ御宇ヨリ其礼傳ト云々
永享年中普廣院修河内国譽田及神功皇后縁起共五卷
其中モ此トアリ又東鑑所々ト及牛追物アリ

いごころん

誘引言問

六条宮真
名伊物ニ

いぢり

時勢糺

又下ニ字イ
ミマツト訓ス

いきかへる

活

ヨミガハル
トモ又糺

いぢり

移住

いねり

反側

詩經ニ

いたり

惆悵

又勞附いた
ル煩又痛

いそげく

驚

日本紀ニ

いそふ

憩

又息
又休

いと

強

或作強又美又艶
又至用ヒ所ヨルヘシ

いづむ

逼

セニル
トモ

いやうへ

上之上

太平記ニ
又弥之上

いゝ

營

假名使ナシ世イト
ナトト書ハ非ク

いそせ

五百歳

作歳作歳并非續後拾俊光君代ハ
ちよにいそせかこひてそ

いたづら

勞

又徠

いさげ

いさげ

吟

附いきあひ
氣喘

いねり

不知

イサヒ

いゝ

暇乞

又一請共ニ
俗言ク

いんげん

稚

作穉同又ホニモ
キニ出

いぢり

壹弄樂

壹越
調ク

いづら

一行

書ク一クダリ
トヒ訓ス

附いちぢり

領

作領俗鎧等ニ
又東鑑ニ小袖ト

ニトアリ糺東寺ニハ
是ヲ一クダリト訓ス

いちぢり

英

花フニ云世ニ云
時ハいちぢり一葉

いちでうー帖声云

空海表屏風一但片云又袈裟等ニモ又書物一冊フー云源氏宇治

十帖又義楚六帖等又紙ニモ云

いちぢうー丈

作丈俗十尺云

いひてう

一貼葉等

いちぢうー張

幕ホ

いちぢうー挺

鉄炮又里等

いちぢうー丁等

いちぢうー雙

屏風

いひてうー口

東鑑所々何寺僧何只順倭注ニ鐘一又玄奘三藏表ニ刹カ一いひてう

声カフ折

いひてうー艘

作艘俗船ニ云

的

人ノ姓之上代ヨリ應永比ニテノ記録ニ有テ用フ雜書等ニ有テ不用以下准之

齊部

いひてう

稻生

いんべかんべ

いさぬ

五百井

いひてう

五百家

いすくと

五十榑

いぬだう

飯高

いぐえ

生江

いりだう

石堂

いりがい

石貝

いぢう

飯河

いんぼ

廬原今いんぼト云庵原

いんぼ

伊藤又一東是モ

いぬづと

飯積

いんぼ

石手

いんぼ

石占

いんぼ

石輪又伊沢ノ時

いぬみ

飯富いぬみトモ訓ス

いぬみ

生夷

いぬぢり

岩淵

いぬひ

犬養

いぬれた

飯尾

いちてう

一條

いひみ

出水

いんぎ

石城

いそぬ

岩井

又一本又一田又一佐等

ろ

呂変ろ又路変ろ
又論変ろ

乾坤

ろくまろく婁宿

作婁宿共俗之東方七星角亢房心尾箕北方七星
斗牛女虚危室壁西方七星奎婁胃昂畢觜参南

方七星井鬼柳星張
翼軫都二十八宿也

ろうがう

陋巷

小里
シ云

ろうだん

龍斷

上字或作龍下作斷俗孟子曰有賤丈夫必
求一而登之以此左右望而用市利

ろくぢり

陸地

リクヂ
トモ

ろうもん

樓門

作樓俗
附一閣

ろぢり

露路

俗ツキ字又
一説炉路

服器

ろくろ

線衫

上字作緑俗下字与襪同二字声リヨクサ然凡拘音通
伊勢物語及栄花物語モロサウトアリ一六位ノ

著衣ナリ衣服令云皇太子、黄丹衣親王、深紫衣諸王一位同
正二位以下五位以上、并浅紫衣諸臣一位、深紫衣二位已下、浅紫衣
四位、深緋衣五位、浅緋衣六位、浅緑衣
八位、深縹衣初位、浅縹也

ろちろかん

驢腸羹

下字声
カウ

ろくまろ

線青

一名碧青日本
州彩色具

ろくは

緑磐

二字声リヨク
三本州

ろくせう

鹿茸

鹿ノ袋角
ヲ云本州

註曰一木可以鼻觀之中有示自與視之不見
入鼻必為真親葉不及也

ろうこく

漏刻

知時器倭訓ナギノキガニ日本ニテ
亦明天皇六年始作之

ろくさい

六采

俗ニ云すくろく雙六子煩倭又九采檮蒲
同書ニカリウキト訓ス和俗云クヨイナ

ろうぎよく

弄玉

倭訓
シテダニ

ろうねだち

六位立

一相當ヨリ内階へ
入者ヲ云ナリ

ろうきよ

籠居

下字与
屈同

ろうねん

弄引

人間天上
ト云

ろうす

弄

伊勢物語ニ云ろくすト云よきて居れりけるトアルハ
論字ノ心之又旁字ノ時ハらうしてノ假名ナリ



波変波変は又盤変盤變を變を
又者變志變心又八變ハ

乾坤

ちんぎん

禁星

字書多音ス一武備志曰禁星中尾向東天下人民
死上殺下也尾向南北天下相殺向南亦然尾向西南

三所逆巨動尾向東南人不安尾向西北臣殺君西北者乾位
尾向東北胡夏不和四尾相連天下太平君臣有徳云々禁出兩尾天

下囚徒
反ト

いづま

殺潮

又初塩ニ説
不知何是非

ヤ一ハ八月十五日方輿勝覽曰
每歲仲秋既望潮水極大也

榜示

作榜作榜同字俗ニ云境杭之東鑑ニモ
所々出タリ煩倭注ニ題示也トアリ

ちうト

とうかく

方角

東、木位西、金位南、火位北、水位中央、土位也又八方、震、巽、離、坤、兌、乾、坎、艮、也

ばんごう

坂東

八州之曰豆相武、兩總房上下野

ばうごう

房州

安房

ばう

坊

訓、十ニケ又コラキ、又職貧令云東宮

ばうぢやう

方丈

島ノ各又僧ノ居、維摩ヨリ始

くわたう

法堂

禪家、所云

はいまつどの

蚊松殿

姉小路堀川、東元橋逸

勢家也、格芥ニ

ともそけ

祝園

神社山城、國相兼郡

ばうきれた

伯耆國

順備ニ又旧事紀ニ波伯國トアリ又古事記ニ伯伎國、古手摩乳足摩乳之娘稻田姬八頭之蛇欲以吞之、故道入山中、干時母遲來姫曰母來、故初曰母來國、後改一ニ之

とくひ

羽咋

能登ノ郡、各同名所

といむら

碓原

遠江、郡名

とけ

幡豆

三河ノ郡名、雜書ニ作頭

とくひやま

羽買山

大和名所、毛火野ニ

近シテ、舊ハ、とくひの山、け、ゆけ、と、ひ、茶、ま、き、と、す、と

とくひ

埴生

俗書ニ作埴生、下、總上總ノ郡名

はうれも

柞杜

山城名所上、字又木ノ名異訓タラノキ、古今ニミカ山のところ、此處乃お葉上有

とぬたぎ

濱菰

古作濱今モ用伊勢國渡會郡ノ在名名所方角ニ見タリ、又葦ノ名トス定家卿家集ニ見テ、伊勢菰、ぬたぎ、菰、比

衣子、か、ね、く、後、も、む、と、と、ん

はうの

走井

逢坂ノ関ノ清、水ト同所ナリ

拾遺ニ元輔、と、り、の、り、と、あ、ね、ハ、あ、な、比

氣形、とらうき

庖羲

伏羲也、蛇身人首、風姓木德、聖是三皇始之、都于宛、始畫八卦、重六十四卦、造書契、以代結繩之政

とらうこ

祝子

神人之附、祝部

とらうこ

襲孫

作衣同、子孫、云、旧事記

ろうかぶりウ
んがーとひモ

防鴨河使 此使ハ次官判官主典等ノ職原ニ

んろく

俵子 順傍註見
童男童女

ハワトモ

母 世ニカト云搦音ニ通ス又父ヲトト

云モチノ訓ニ通ス

ばんごう

番匠 作匠俗工匠ノ

んくらう

博勞

相馬者ノ字書ニ見タリ下学集ニハ馬口勞トアリ作意ノ殊ニ馬喰ト書ハ野人ノ充字ナリ

んせふよ

班婕妤

漢ノ世ノ女閨裡ノ扇ノ故事アリ一婦也

ほうちやう

庖丁

為魏文惠君解牛事見莊子養生主篇丁子ヨク庖厨ノヲ知テ宰烹スルニ今調料理者ヲ庖丁ト云器ヲ庖丁ト云日本ニテ庖丁者ノ初ハ四糸家ノ庶流山陰中納言也ト云徒然草ニ

んやまを

早雄

ワカ武者ナドニ云 いたたかきり 賣炭翁 白楽天文マ可感ノ詞

んせせ

長谷雄

紀氏寛平三始テ讀漢書同ハ講文選云

んらう

腸

作腸俗如斯一字ノ訓ニ字心アル時ハワカチ他准之附大ノ小ノ字共ニホソワタト訓ス

んんかう

半額

んごへ

肌 又膚順傍ニハカハト訓ス

んろくろ

黠

或作肱又黒點共ニフスト訓ス

んろくろ

膀胱腑 倭訓イバ

んひむま

驛馬

須傍注一ハ突惡馬ト云々附るひむま此るト障子在大内惣テ物ヲハスルニハ段字首ヲハスルニ列字

んやま

颯馬 早馬ナリ

はごせむ戸

驛馬

馬不施鞍轡也

んいたう

鷓 作鷓俗缺ニ云々トヨモ搦音ニ通テ

一之慈鎮和尚云たれこるを此羽凡多きたて又言塵集曰鷓ハハシタカニこのり此雌ト

もへ

鮫 本州ニ又晚未詳東国是ヲハマト云
源氏物語ニ入ルコトアリ

まひ
バエヒ

海蠃 又流螺
本州ニ

ふどり

促織 下学ニハ
字ニ未詳

まふじ

昆蟲 日本紀ニ又中臣拔ニモ出タリ註曰田畠ニツク虫ナリト
又蝗虫ノ二字自氏文集ニ又万葉集ノ歌ニあきつこれ

くひらふひ
モトアリ

まごらふも

蠅虎 出所
未考

まんめう

斑猫 毒虫殺ス
本州ニ夏タリ

まへ

蠅 淮南子ニ燼灰
中ヨリ生トアリ

和訓依之乎日本紀神代卷ニ一聲ト書テサワヘナスト訓又
清少納言カ枕草子ニ入ルコトをいふきとの内ホトアリ

生植
もつえ

裔 古今ニ梅のつえトヨメリ倭名ニ初枝ト註又ほつえニ枝
附くも葉枝或末枝祝部成仲と云ふは落葉神也ト

もじけき

檀木 出所
未詳

まうやく

苞木 竹ノ
トシ

まねんさう

菠薐菜 音ハレウサイ和訓ニ
相通ス

もね

菖 作苾同蓮ノ
弱根ヲ云

まふ

防風 和訓ハニガ
ナ別録ニ又

もろこ

菴蘆子 俗ニもろこト云フ
ト書不可用ス

まへいづ

茁 草木ノ
生ナリ

もろき

苔草 又地膚
トモ

まろこ

薑 一通神明ニ去
穢惡故孔子不

撒食又生ト書テ
アハジカニト訓ス

まづ

巴豆 和訓アレモ
ノメ

ふせを^ウ

服器 こんはが^ラ

芭蕉 本名甘蕉バセラハ訓ニアラズ声ノ変ハバセラバセウ相
通ス古ハハセトバト云古今物ノ名ハハセハハセハハセ

初穂 言塵集早米ト註セリ供神モノヲ云
又首花ト書最花ト書テモ同訓ニ

ぐうせう

芒消 下字又作硝
訓ギエセウ

ぐんぶ

蠻繪 舞人ノ装束ナリ

ふうせん

芳飯 又苞トモ

ふいたう

陪堂 禪家ニ飯米ノコトヲ云ノ由

くうたび

纏 馬腹帶ノ中略
メハルビトモ

くうしや

蓬砂 又鵬砂トモ

くくじやう

百和香 古今集物ノ名ニソクソク
ワウーハハハハ

くしん

祓 説文曰除惡祭ニ一又禊祓解除氏神道者多ハ作祓以禾ハ俗
トイハ古事アリ附中臣ノ清ノ名越ノ荒和ノ節折ノ

又くくつモノ一具
日本紀一書ニ

くくじやう

白丁香 雀糞ナリ

くくじやう

腹赤贅 上字作腹俗年中行事曰元日献天子ニ
景行天皇時始ハラカハ鯨魚トカク

くい

灰 声クワイ字書ニ死火ト註又作灰非枕草子ニ云
火桶のひもあきえいこうなるたね

くひすこ

掃墨 古書ニハ
えいすこ

榜額 上字榜又
榜共同字

也一ハ掛ルト云サハ
誤ノ由世額ト斗用

くうご

放巾子 冠ノ元服ノ時用之

委束帯
色目ニ

くねひ

葎 又セニ
アリ

くうめんけい

祭ノワタシ物ノ名徒然草ニテ傳故ニ文字不出之又東鑑二十三ニ
雜色四人調度懸一人放免四人トアリ是ハ心カハルナリ

くむ

朔 弓ノ本一末一之附ゆんむ弛又るむさう一苦刺アル人ノ云
くむれノ畧カ然ハくむト可書ト之サニハアズクノノ憂

也くむトイハ
齒音ニ相通

くむがハ

紕革 一与縹
同字

ふんふん

拂子

頌倭ニハ白拂ノ二字千手經ニアル由
常ニ聲ヲ用テ禪家ノ調度トス

ふつ子

馬

又絆網
トモ

ふまぐり

華返

下学ニ
未詳

ふれぼろ

牛麩

用牛ニ
具

ほうろく

炮烙

物ヲイル
器ニ

ふふに

白粉

頌倭ニ見タリ此訓ハ類ニヌルニト云心方左アラス
やノノカナカ又俗ニまろいもの又和乃イト云

ふぬちわい

丈蛤殼

下字カラ
トモ訓ス

いごい

筋匙

異国人食
事ニ用之

ふく忍ぎ

博奕

昔ノノト云人初テ作_レ棋_ヲ今俗ニ一切
博ノ勝負ヲノト云弈与奕同字

ふろーぎ

柝

声タク作柝作櫟モ亦同又ひろーぎ_ニ拍子木_ニ
孟子_ノ註_ニ朱子曰_一夜行_ノ所_ノ擊_ノ手木_也ト

ふうきあう

方磬

樂器_ニ
頌倭_ニ

ふんてふ

半疊

タ_ニ

ふんざふ

匱

半_ノ挿_ノイ_ニ字_ノ声_以テ_一字_ノ訓_トス_下学_ニ用_ニ椽_字ヲ_出所
未詳頌倭註曰有柄半挿其内故呼_テ爲_ニ半挿_也ト又沃

盥ト書テハシガフ
ダラヒト訓ス
楯衣ト書テイ
だてト訓ス詩經_ニ

はいだて

脛楯

上_或佩_用下_ハ
皆ト斗モ又

謂_ニ之_ニ權_兼名_苑ニ_云
銓_一名_銜稱_也ト

はろれり

權稱

頌倭註曰
廣雅云銓_ハ

銓一名銜稱也ト

ふつき

帚

作帚俗字附_テ
ま_ニつき_ニ莖

雜事

ふへか

今案_ニま_ニえ

無榮

又無光又
無見_{日本}紀

ふふ

這

虫ノハフニ_ハ蚊_字
又葛ナドノハフニ

ふづひ

羽操

礼記_ニ雁_鳥乃_シ学_ニ習_トアリ_附く_ぼく_ろひ_喇
玉篇註曰鳥治_毛衣_トアリ

トアリ附_くぼ_くふ_畵
草字 詩ニ云葛_ノ草_ヲ施_テ干_中登_ニ

くまいて
なまちて

放

又人ノその一ニモ俗ニカク嘯字非ニ又咄
イフカシ又矢ヲなまちつニハ發字也

くいて

帶

作帶俗劍ヲハクニ常ニおひト訓ス
又履ヲハクニハ著字ナリ

くむむ

却含

鞠ナトニ云
又餘字

くぬ

端居

くどく

彈

俗作彈

くろ

走

奔同ハハワト
ヨムナリ

くまむねん

傍若無人

王猛捫虱古事
ヨリニ云

くむん

方便

タバカルト訓ス
佛書ニ

くむん

判官

長官次官一
アリ常ニハシラ

くむらう

八省

中務式部 治部 兵部 刑部
民部 大藏 宮内 以上一也

くようらく

放鷹樂

乞食調ノ
内但無舞

くやん

飽滿

作蒲俗
又一食

くろうぶ

汎龍舟

水調乗ノ内之ハシ
シラシウト不讀

くさう

疱瘡

上字或作胞則豆疱トハ見干醫書痘瘡トアリ
病論起於漢張仲景日本ニテ鎌足大臣初テ患之由
又類聚国史仁壽二年胞瘡
流行ノ人民疫死スト有

くらあひ

張合

對揚スルヲ
云又治合也

くひる

抛返

馬ノハヌル等ハ
前ニシルス

くひゑ

廢壞

作壞俗
附一忘

くむらう

繁昌

一榮

くばれ

端

矢ハハルニハ外字也
絃ヲツスハ弛字

くむらう

拜領

作領
俗

くまむねん

放生會

元正天皇養老四年九月異国龍来日向大隅
大乱皇祈宇佐太神詔曰是戰其死傷多矣我
甚憐之願寇平之後置放生于諸国八幡一自此始云々又最
勝王經長者子流水品池魚之芟アリ是其因縁ト云

いづらう

葬

いづらうトモ伊物ニ云ミテミコトウセ
終々切腹んいづらう此衆

はぐめ

始

又初又いづめ
をりり終

いいたう

配當

いづらひ

髻方髻

いづらひ

自狀

はらひ

評

又計

いづらひ

傍輩

いづらう

放埒

下字声シツ作埒俗之人不順法度如生馬放埒也ト云々
又放敢埒ノ三字ヲいふらトドト訓ス古今誹諧ニオナナク
後々たふもいづらう一附るいづらう下
下師又いづらう一逸又いづらう一題 詩哥ニ云

同仕ノ者

いづらう

謗法

難

いづらひ

拂

又撥又掃

いづらひ

恥

作耻俗
又辱

いづらひ

忘却

いづらう

榛原

今姓以
下準之

いづらう

門人

いづらふ

羽生

いづらひ

鳩貝

いづらふ

波々伯部

いづら

番長

いづらひ

芳賀

今云
ト云

倭字古今通例全書卷一終

伊

九

